



～年間聖句～「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章17節

## 「小さな物語」

高校生の中に、自分の希望進路を語ることを阻まれ、自分の生きる道がわからなくなっている人がいないだろうか。世の中では、その生徒の「小さな物語」に耳を傾ける前に、「現在の成績」「グローバル化」「AI社会の到来」などの「大きな社会像の物語」を聞かされ、それに順応するために、学ぶことを求められたりします。成績優秀なら難関大学をすすめられ、親からは給料が安定した仕事に就くように説得されたりします。それでも大人は、生徒の主体性を尊重しようと「自分で決めなさい」としか言わず、どうすればよいか困る生徒が、大人の考えを忖度し、それを自分で考えたように語ることもあります。また、生徒が主体的に考えた進路であっても、その進路が前例にない場合は耳を貸さないこともあります。

私たち大人が語る「大きな物語」は、生徒が豊かに生きる道の1つに過ぎません。生徒の身体的特性や置かれた環境が異なれば、生きる道も異なります。「大きな物語」が、生徒一人一人の「小さな物語」を上書きすることはできません。

生徒にはそれぞれ「小さな物語」があります。私は、生徒同士の「小さな物語」の響き合いがキャリア教育になると考えています。それは人が集まる学校の存在価値をつくります。同じ学校に入った、同じ部活に入った・・・同じ選択をする生徒同士でも、選択に至るまでの人生は異なります。その生徒の過去から現在、そして未来が「小さな物語」なのです。

私自身、「大きな物語」への順応がとても下手な生徒でした。ただ「小さな物語」を友だちと響き合わせていたことはおぼえています。

私の高校入学のワクワクは、「サッカーを頑張ろう」でした。それには理由がありました。私の中学時代のサッカー部は、学校の荒れの中心的存在の集団で、真剣にサッカーをする環境ではなかったため、高校では、「真剣にサッカーをやりたい」という思いは入学前からもっていました。当然高校では、これまでの人生は異なっていますが、サッカー部に入部するという同じ選択をした仲間と出会います。仲間の中には、「中学の時はゴリゴリの部活だったので、のんびりやりたい」という友だちもいました。私と真逆です。ただ、私と友だちとのそれぞれの「小さな物語」の響き合いはありました。私は彼の「小さな物語」を聞くと、すごく影響を受けたことを思い出します。彼の話で、一生懸命やるということとはこういうことなんだと、なんとなく理解したのをおぼえています。

大学進学でも同じような話になると思います。そこで、この「それぞれの小さな物語を響き合わせて学生生活を送ろう」という話を大学生の礼拝で話しました。受験科目が得意科目だったから受験した学生や、〇〇になるんだと受験した学生や、一人一人の「小さな物語」は異なりますが、同じ選択をしているのです。どんな場所でも、そこにいるということは、同じ選択をしたということです。その後の未来はまだわかりません。次の選択は違ってもかもしれませんが、それぞれの人生は続いていきます。人生は続くことに意味があるのです。

生徒のみなさんも保護者の方も、女学院という同じ選択をした仲間として、それぞれの「小さな物語」を響き合わせましょう。

私は、生徒一人一人の「小さな物語」に光を当てて、生徒と響き合っていくことが、進路指導の本質だと思っています。